

# そんりさ vol.191



2025年3月16日、エルサルバドルのテロ監禁センターに移送された  
トレン・デ・アラグアの構成員とされる人々

<https://www.npr.org/2025/03/16/g-s1-54154/alien-enemies-el-salvador-trump>

混迷の国ベネズエラの世界的犯罪組織  
トレン・デ・アラグア

02	混迷の国ベネズエラの世界的犯罪組織トレン・デ・アラグア	……山本 昭代
06	未来のマヤ人世代に向けた普遍文学としての 「新しいマヤ文学」	……吉田 栄人
10	グアテマラ・アップデート	……新川志保子
12	ペルー音楽 ラテンアメリカにおけるフェミニズム をめぐる歌の旅(7)	……水口 良樹
14	ラ米百景 文豪バルガス=ジョサと教皇フランシスコ	……伊高 浩昭
15	ムネちゃんのLA 情報拾い読み・斜め読み	……小林 致広

2025年5月10日 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク (RECOM) 発行

# 混迷の国ベネズエラの世界的犯罪組織 トレン・デ・アラグア

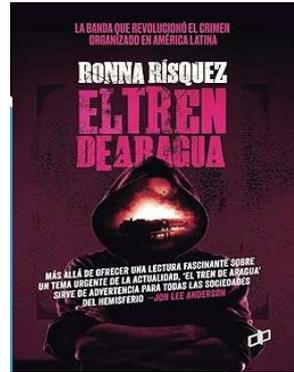
山本 昭代

今年3月、米国のトランプ大統領がベネズエラの犯罪組織メンバーとされる238人を国外追放とし、エルサルバドルの刑務所に送り込んだ、というニュースが流れた。それも、かつて第2次世界大戦中に多数の日系人を強制収容所に送り込んだ根拠とされた「敵性外国人法」という19世紀末のホコリをかぶった法律を持ち出してである。連邦判事が国外追放命令を差し止める仮処分を出したにもかかわらず、ベネズエラ人が乗せられた飛行機はすでに離陸していた。送り出された先は出身国のベネズエラではなくエルサルバドルだった。エルサルバドルのブケレ大統領が、その悪名高い巨大刑務所に約300人を1年間、600万ドルで受け入れることに合意したからだと伝えられる。

トランプ大統領が左翼独裁政権のベネズエラを毛嫌いし、経済制裁だけでなく、不法滞在者に対してもより差別的な対応をとっても不思議ではないかもしれない。しかし、ベネズエラの刑務所ギャング、トレン・デ・アラグアという名を初めて耳にして、それはなに？と思った人も少なくないはずだ。トランプ大統領は、就任早々に中南米各地の麻薬密輸カルテルやギャングを「外国テロ組織」に指定し、メキシコのシナロア・カルテル、ハリスコ新世代カルテル、中米のマラ・サルバトルチャなどと並んで、ベネズエラのトレン・デ・アラグアの名がリストに挙げられた。

実際、同じように思った人は多いらしく、いくつものメディアで「トレン・デ・アラグアとは？」という記事が出た。しかし古い記事を参考に書かれたらしい解説もあり、必ずしも正しい情報ばかりではなさそうだ。筆者自身、しばらく前にベネズエラのギャングが支配する刑務所が摘発され、中にあった遊園地やプールが破壊された、というニュースが流れたとき、不思議の国ベネズエラなのだなあ、と見たくらいの記憶しかなかった。その刑務所ギャングはベネズエラという特殊な国家ならではの環境から生まれ、社会的・経済的危機とともに成長し、ペルー、コロンビア、エクアドル、チリなど南米各国へ、さらに北米大陸にまで影響を及ぼしつつあるという。

同国のジャーナリストで犯罪組織研究の第一人者のロンナ・リスケス (Ronna Rísquez) の本 *El Tren*



出版以来、著者と何人もの親族が脅迫を受けている

*de Aragua :la banda que revolucionó el crimen organizado en América Latina, Dahbar, 2023*

『トレン・デ・アラグア—ラテンアメリカで組織犯罪に革命を起こしたギャング団』)と、その後の報道をもとにして、この組織について紹介してみたい。

## 塙の中の別世界

まず「トレン・デ・アラグア」という名前。「アラグアの列車」という意味である。アラグア州はベネズエラの中北部、首都カラカスの西に位置する。アラグア刑務所は州の中部で首都から南西に130 kmほどの距離のトコロンという村にあり、トコロン刑務所とも呼ばれる。この刑務所が組織の根拠地であった。鉄道の建設労働者組合から発生したという説もあるが、リスケスによると、組織のこれまでのリーダー格の人物の中に鉄道組合に関係があったものはないという。ベネズエラ各地に「トレン・デ・～」と名乗る組織が複数あったことから、それにならって名前を付けたものとみられる。

2023年10月、ベネズエラ国軍と警察がこのアラグア刑務所に一斉手入れを行い、その実態が明るみに出た。なんと動物園、遊園地、プール、カジノ、レストラン、酒店、高級ブランドショップ、麻薬の小売店、さらにその名も「トキオ (Tokio)」という高級ディスコもあり、パーティにはテレビに出ているアーティストらも来ていた。独自の「銀行」もあ



トコロンの位置



トコロン刑務所にあった高級ディスコTokio と遊園地  
<https://diestralarevista.com/el-lujo-que-vi-cuando-entre-en-la-carcel-de-tocoron-el-bunker-del-temido-tren-de-aragua-en-venezuela/>

り、現金自動支払機には、みかじめ料や持ち去られた自家用車の「身代金」を支払うために、塀の外から市民が列をなして来ていた。観覧席や人工芝を完備した野球場では、有名なベネズエラ人大リーガーもプレーしていたという。ベネズエラは電力不足で日常的に停電が起きているが、ここは自家発電所を備え、刑務所とはとても思えない環境である。

組織の大ボス、「ニーニョ・ゲレロ」ことエクトル・ゲレロ・フローレスは、他の幹部とともに一斉手入れの前に逃亡し、所在はつかめていない。ちなみにベネズエラでは、刑務所ボスはプラン (pran) と呼ばれる。一説には Preso Rematado, Asesino Nato (最強の囚人、生まれながらの人殺し) の頭文字をとって創られた言葉とされる。プランが支配する刑務所システムをプラナト (pranato) という。スペインのリアル・アカデミアの辞書にはまだ収録されていない言葉である。

## 究極の犯罪資本主義

アラグアでのプラナトとはどのようなものだったのか？ 手入れ前の刑務所では、高級住宅街を思わせる一角もある一方で、あばら家のような家屋が並び、不衛生な環境の区域もあった。塀の中も外の世界と変わらず、暮らしは金次第だった。受刑者からは週 15 ドルのカウサ (causa) と呼ばれる一種の税金が徴収され、これによって刑務所のインフラが維持されていた。払えないものは農作業や清掃などの作業をし、それもできないものは殺されることもあった。金銭に余裕のあるものは個室に住み、週末に家族が訪問して泊ったり、一緒に暮らしたりすることもできた。

刑務所内には看守など公務員は不在で、代わって武装した組織メンバーが警備を行う。ニーニョ・ゲレロが定める規則に従わなかったものは罰を受け、死刑もあった。コロナやエイズなど重度の感染症を

罹患したものは、隔離棟に閉じ込められ、治療もされず食事も与えられず死なせていたという。究極の犯罪的資本主義といえるだろう。

リスキスによると、ベネズエラには 2023 年当時、53 の刑務所があり、うち 8 か所は受刑者のボスがコントロールする「自治」刑務所、プラナトだったという。経済制裁と原油価格の下落で国の財政がひっ迫するなか、実質的に政府よりも経済力も武力もはるかに上回る犯罪グループに刑務所の運営を譲らざるをえなかったのだ。刑務所運営の第 3 セクター化ともいえる。

刑務所から 30 キロほどの州都マラカイのサン・ビセンテ区は、犯罪グループが支配し、警察が足を踏み入れられない「和平地帯 (zona de paz)」である。「和平地帯」とは犯罪率が高すぎて当局が手を出せない地域に対して、マドゥロ政権が組織との緊張緩和のために設けたもので、地区内では組織は犯罪を自粛するという建前だったが、実際には犯罪者天国と化していた。アラグア刑務所の飛び地であるこの地区には、首都や港につながる高速道路や、小さいながらも近くに空港があることから、麻薬や武器の密輸のために重用な役割を果たしている。

## 犯罪の多角経営

トレン・デ・アラグアのボスらは、塀の中にいながら SNS を通じて国内外に指示を送り、恐喝、誘拐、詐欺、麻薬密輸、人身売買、強制売春などの 20 種類もの犯罪から莫大な利益を得ていた。それを可能にしているのが、ゲレロらを頂点とするピラミッド型の組織と国内外の他の犯罪組織との連帯である。構成員は 5 千人以上とみられる。

組織は一般住民から恐れられている一方で、支配地域では当局に代わって治安維持やごみ収集を行い、裁判所と同様に人々の間の問題を解決する。地元で音楽イベントやスポーツ大会を催すなど娯楽も提供し、人々に親しまれ信頼されてもいる。国家が機能しない部分を犯罪組織が埋めているともいえる。

ボスのゲレロは 1983 年生まれ、アラグア州の貧しい家庭に育ち、2010 年に警察官殺害を含む複数の罪状で起訴され、トコロン刑務所に収監された。そこで若くしてプランの座に就くが、2012 年に看守らを買収して脱獄。しかし翌年再び逮捕され、17 年の刑が確定する。この脱獄劇の際に注目を集めたのがロシータという名前の人気タレントで、ゲレロの恋人とうわさされ、脱獄にかかわった疑いで取り



ベネズエラ当局のエクトル・ゲレロの懸賞金付き指名手配書  
<https://www.bbc.com/mundo/articulos/cldgdke2k1go>

教信者で、同じ宗教を信仰する受刑者には一部特別扱いもある。だが信者のふりだけしているものには容赦がないという。刑務所に暮らす人々は金さえあれば、麻薬は自由に手に入り、依存者の割合は高いが、ゲレロも他のリーダーも薬物を使用することはない。

### 刑務所内にマリワナ畑

企業や商店に出させるみかじめ料は組織の安定した収入源である。それは民間の警備保障のようなものだともいわれる。盗難保険に入る代わりに組織に支払っておれば、従業員に持ち逃げをされたようなケースなら組織が解決してくれる。警察はあてにはならないのだ。現金で払えない中小事業所は、食料品など現物で納めることもできる。支払いを拒んだ会社は脅され、焼き討ちに遭うことになる。このため会社をたたんで国外に出ていく経営者も多い。

世界中のどこの犯罪組織とも同様に、ここでも麻薬の生産・小売り・密輸は大きな収入をもたらす。刑務所内にはマリワナ畑があり、覚せい剤の製造ラボもあった。コロンビアから運ばれるコカインの一部は、武装グループが支配する北東部の沿岸地帯に運ばれ、イワシなどの海産物の加工会社のコンテナにまぎれて、カリブ海の島国やヨーロッパに送られる。このルートの支配を巡って犯罪組織間の抗争が起り、アラグアから囚人が支援部隊として送り込まれたこともあった。抗争に勝てば自由の身になれるといわれてバスに乗せられ、銃撃戦を生き延びたにもかかわらず、辺境の地で金も払われず迎えも来ず、若者たちが何人も取り残されたこともあった。

武器の密輸・密売も重要な収入源のひとつである。入手先はおもにベネズエラ国軍と警察である。トロン刑務所のすぐ近くにある、軍事産業会社で製造されたものが横流しされていた。国家と犯罪組織は

調べを受けた。結局、証拠不十分で釈放されたが、メキシコのマフィアと同様、ベネズエラでも犯罪組織のボスが若い世代からあこがれや崇拜の対象になっていることがうかがえる。

ゲレロ自身は慎重な性格で、表に出ることを嫌い、写真も少ない。母親にならって熱心なキリスト

まさに表裏一体の関係である。おもな買い手は南部ボリバル州で金鉱山の見張りをする武装グループだ。商売なのでアラグア派の組織だけでなく潜在的なライバルにも売っているという。ベネズエラ国内ではライフル銃は1丁5〜8千ドルだが、ブラジルでは2万ドルで売れる。ベネズエラ国軍の武器はブラジルのギャングの手にも渡っている。

### 政府の汚い仕事

ベネズエラの地方の刑務所ギャングが、どうやって米国が自国に対する脅威とみなす国際的組織にまでに成長したのか？ それはベネズエラ国家が社会的にも経済的にも破綻し、多くの国民が国外に脱出せざるを得ない状況になったことと深く関係している。

2017年、ベネズエラでは急激なインフレと政府への不満から各地で激しい抗議デモが起きていた。死者163人、逮捕者は3千人にもものぼった。このデモの鎮圧にトレン・デ・アラグアをはじめとするメガバンダと呼ばれる犯罪組織が、政府の要請で駆り出されたのだ。政権のために汚い仕事を引き受けることのメリットは大きかった。

マドゥロ政権との協力関係はその後も続き、反体制派の暗殺にこの組織がかかわるケースがしばしば起きている。最近では2024年にベネズエラの反体制派の元軍人が亡命先のチリで誘拐され、10日後に遺体で発見された事件があった。今年になり、チリ在住のトレン・デ・アラグアの幹部が指示役だったとして逮捕された。ニーニョ・ゲレロの指令で仕組んだとされる。

ゲレロが個人的にマドゥロ政権に心酔し、反政府派を殺害しているとは考えにくい。かつて暫定大統領を自ら宣言し米国などが支援した反政府派のグアイドーが、2019年にコロンビア国境から米国の人道支援物資を運び込もうとした時には、グアイドー側に付いてベネズエラ治安部隊とたたかった過去もある。

### 移民とともに国外に拡大

トレン・デ・アラグアの組織は、国内の混乱から逃げ出すベネズエラの人々の移動とともに拡大していった。被害者は困窮した同胞たちである。国境で金をゆすり、出せない人を殴りつける、見逃す代わりに麻薬や武器を運ばせるなど、非道な側面もあるが、閉じられた国境を越えさせる、互助組織的な側面もなきにしもあらずである。インターネットで旅

行代理店を名乗るグループの「バックツアー」では、何百ドルか支払えば、昼食も支給され、検問にかかることもなく国境を越えることができる。これも当局を賄賂漬けにしている強力な組織が背景にあることである。もちろん金だけ払わせて客を置き去りにするケースもあるので、安心はできない。チリでは、トレン・デ・アラグアが100台ものバイクを購入し、不法滞在のベネズエラ人にデリバリーの仕事を提供していたことがあった。大量のバイク購入はマネー・ロンダリングの目的もあったようだ。

さらに重大な国際犯罪の代表的なものは、性的搾取のための人身売買である。しばしばベネズエラ国内での美人コンテストが女性のリクルートに利用される。女性に海外での仕事を斡旋すると騙して借金を負わせ、実際には奴隷状態で売春させる手口である。ベネズエラ人の支部がある国では、同国人の管理下で売春させられ、その売り上げが本国のニーニョ・ゲレロのもとに送られる。ベネズエラのすぐ東の島国トリニダード・トバゴは英語圏で、ベネズエラ人の組織はないので、同国のマフィアのボスに数百ドルで、文字通り売られるという。

## 違法採掘の「血の金」

犯罪組織にとっても、また経済制裁と原油価格の下落で困窮するマドゥロ政権にとっても、またとない収入源となっているのが金鉱山である。ベネズエラといえば原油と思い込んでいたが、実際には世界有数の金の産出国なのだ。近年の金価格の高騰が続くなか、ゴールドラッシュとあっていい好況である。大部分が違法採掘であるため、産出量が公にならないだけだ。

ブラジル国境に近い南部ボリバル州には豊富な金の鉱脈があり、ダイヤモンドなども産出する。鉱山ごとに複数の武装グループが支配しているが、なかでも世界第4位ともいわれる最大のラス・クラリータス鉱山を支配するのが、トレン・デ・アラグアの共同創設者のヨアン・ペトリカという男である。アラグアから受刑者が労働者や見張り役として送り込まれてもいる。

アラグアと同盟関係にあるブラジルの犯罪組織、首都第1コマンド(PCC)が資金を出し、ベネズエラ領内の先住民地域で違法採掘を行うこともある。ペトリカの組織はこれまで、ほかの武装グループとの抗争で大量殺人や行方不明事件を起こし、また先住民地域に侵入し、アマゾン地域の環境に深刻な打撃を与えている。ベネズエラの金が「血の金」呼ば

れるゆえんである。鉱山地域では、採掘や精製だけでなく、地元での食料や生活用品の売買などあらゆる経済活動からみかじめ料が取り立てられている。

ベネズエラの汚職を調査するNGOの推定によると、金採掘による利益は、2021年は23億8500万ドルにも達したが、うち75%は違法取引だったとされる。その中から政権や政府高官らに賄賂の形でかなりの資金が還流していると考えられる。

## トレス・パパス

トレン・デ・アラグアは2015年頃に成立した新しい犯罪組織だが、イタリアやメキシコなどの老舗マフィアと同様に、確固としたヒエラルキーを伴う組織形態を確立している。リスクによると、組織のベースになっているのはプランに対するメンバーの忠誠心で、独自の組織的文化を醸成しているという。それはひとつの家族のようで成員は互いに「兄弟」と呼び合い、リーダーらはpapás(父たち)と呼ばれる。トレス・パパス Tres Papás(3人の父たち)と呼ばれる3人のリーダーのうち、もっとも有力なのがニーニョ・ゲレロだが、リーダーのひとりを見失っても組織は継続する。

さらにアラグアの国際的犯罪組織としての特徴として挙げられるのは、その順応性である。長引く経済危機の国を逃れ、移民として行った先の国の社会で隙間を見つけ、目立たないように努めながら、様々な犯罪活動から利益を上げている。組織のボスたちは、金(カネ)か、銃かの選択を迫られた時は、基本的に金を選び、ライバル組織との武力抗争はなるべく避けてきた。ブラジルのPCC、コロンビアの民族解放軍(ELN)やクラン・デル・ゴルフオといった周辺国の既存勢力と友好関係を結んでいる。

移民に対する各国の規制強化は、組織にとってむしろ好機である。違法に国境を渡りたいと願う人々が絶えることはないからだ。より危険なルートに、より高額な賄賂を当局に払って行くには、裏世界に通じた組織の仲介なしにはありえない。

トレン・デ・アラグアはトコロ刑務所という物理的拠点は失ったが、ボスはどこにいても、これまで通り、世界中からリアルタイムで情報を得て、SNSで指示を出すことができる。第2次トランプ政権による経済制裁の強化や移民の締め出しは、行き場を失い、未来に希望を見いだせない若者を増す。犯罪組織は新人のリクルートに困ることはない。これは、中南米の他の国でも同じことがいえるかもしれない。

# 未来のマヤ人世代に向けた普遍文学

## としての「新しいマヤ文学」 吉田 栄人

マヤ文学と言えば、一昔前までは、植民地時代にマヤ先住民がマヤ系言語で書き残した『チラム・バラムの書』や『ポボル・ヴフ』などの古文書を指していた。1980年に出された『マヤ文学』（メルセデーヌ・デ・ラ・ガルサ著）は、植民地時代に書かれた様々なマヤ系言語による文書を編纂したものだった。そもそもデ・ラ・ガルサ氏は植民地時代文書の研究者なので致し方ない。むしろ、それらをまとめて「文学」と称したことを評価すべきなのかもしれない。当時、先住民社会に文学が存在すること、あるいは先住民が文学作品を書くことを真剣に語る人はわずかな研究者を除けば、ほとんどいなかった。

だが、ユカタン半島では実は20世紀前半に、ごくわずかではあるがマヤ語の詩などを文学として紹介する雑誌『イカル・マヤ・タン』（Yikal Maya Than、マヤ語の風、1939～1947年）が発行されていた。また、マヤ先住民の口頭伝承をベースとした文学作品はその雑誌の発行に先立っていくつも書かれている。メキシコ革命が終息し、先住民の復権が国家運営の課題として浮上した時代だ。

ところが、国立先住民庁（INI）が、先住民「問題」を一手に引き受け、先住民社会を国家の中の特殊な社会として分離したことで、国民にとって先住民文化は社会から取り残された奇異なものとなされるようになっていった。先住民文化を国民文化の形成に活かそうとする『イカル・マヤ・タン』の取り組みはこの官製インディヘニスモには到底太刀打ちできなかった。一方で、革命の継承を標榜する歴代政権は先住民の国家への統合を推し進めた。特に学校におけるスペイン語教育によって先住民共同体は切り崩されて行った。交通手段の発達と交通網の整備がそれに拍車をかけたのは言うまでもない。

1980年頃のユカタン半島では、先住民系（征服から500年の年月も経ってメキシコ国民となっているのに、先住民と呼ぶのはいかにも不自然なの

で以下先住民系と呼ぶ）の子どもたちはほとんどマヤ語が話せなくなっていた。親世代が学校でスペイン語を強要され、辛い思いをしたが故に、子どもたちに対してマヤ語で話しかけることがいっさいなくなったからだ。多くの先住民系人が母語としてのマヤ語を失った。出自は先住民系であっても、先住民系の母語はスペイン語であることがほとんどだ。親同士がマヤ語で話すことはあっても、親子間ではスペイン語で話すという家庭内ダイグロシア（言語的棲み分け）が生まれていた。

現在、マヤ語話者は約80万人程度（なお、これは5才以上のマヤ語話者の人数であり、先住民系（マヤ人）の人口と同数ではない。先住民系人を、祖父母がマヤ語を話していた人たちに限定するだけでも、その数は何倍にも大きくなる）だが、そのほとんどはスペイン語とマヤ語のバイリンガルであり、マヤ語のモノリンガルはその10%にも満たない。そうしたマヤ語モノリンガル話者の多くは経済的困窮者でもある。

もうお気付きだと思うが、そんな状況でどうすればマヤ語文学が成立するのか。仮にマヤ語で文学作品を書く先住民系人作家がいたとして、その本をどれだけの先住民系人が買って読むことができよう。商業的な観点から言って、マヤ語で書かれた文学が成立する市場など存在しない。それでもマヤ文学が存在する。非常に奇妙な文学運動が存在しているからだ。結論の先取りになるが、私は、マヤ語で書かれている現代マヤ文学は未来のマヤ人（マヤ語話者）に向けて書かれたものだと考えている。現在書かれているマヤ語の文学作品は必ずしも同世代の先住民系人をターゲットの読者にしているわけではないからだ。

マヤ語が話せる先住民系人だからと言って、マヤ語で書かれた文学作品を読めるわけではない。マヤ語で読み書きのできるモノリンガルの先住民などおそらく皆無だろう。バイリンガルのマヤ語話者であっても、マヤ語の読み書きのできる人はごく少数であり、さらに、マヤ語が読めても、

マヤ語の文学作品をマヤ語で読む人はほとんどいない。マヤ文学には必ずスペイン語の対訳が付いているので、スペイン語訳の方だけしか読まないという話をよく耳にする。

あえてマヤ語の原文を読むのはマヤ語の勉強をしたい人だけに限られる。つまり、マヤ語で書かれたマヤ文学作品を真の意味で読む先住民系人読者は現時点では皆無に等しい。そんな読者は多くの先住民系人がマヤ語の読み書きができ、マヤ語の文学作品を嗜むことができるようになった未来にしか存在しないのだ。

では、先住民系人作家たちは一体何のためにマヤ語で文学作品を書いているのかと言えば、大雑把に言えば、マヤ語を「失った」世代つまり親世代からマヤ語を教わらなかった先住民系人たちの言語回復願望を満たすことを使命としているからだ。

1970年代から1980年代にかけて先住民言語の復興が唱えられるようになる中で、マヤ語による口頭伝承の採録が盛んに行われるようになる。同時にマヤ語識字化の一環として文学セミナーが盛んに行われる。その文学セミナーから優れた先住民系人作家が多数輩出されたわけではないが、マヤ語で文学作品を書くという行為そのものはマヤ語復興運動の重要な推進力となっていく。2000年代に入ると、そうした社会的要請をエネルギーとしてマヤ語の読み書きのできる若いインテリたちが、マヤ語による文学的創作を始めるのだ。私が翻訳した「新しいマヤの文学」シリーズは、そうした文学作品の中から何らかの賞を受賞した優れた作品を集めたものである。

マヤ語でマヤ社会が描かれているという点で、植民地時代の「マヤ文学」との連続性がないわけではない。いったん途絶えた文学的伝統が復活したようにも見えるので、この新しいマヤ文学の登場をマヤ文学ルネッサンスと呼ぶ人も少なくない。しかし、先にも述べたように、新しいマヤ文学は未来のマヤ人に向けて書かれたものである性格が強い。

現代的意義があるとすれば、「失った」マヤ語の「回復」を通じた民族的復権という脱植民地主義

	<p>ソル・ケー・モオ『女であるだけで』（国書刊行会、2020年）</p> <p>日本語訳9頁 午後の五時になろうとしていた。それは三月最後の週の金曜日のことだ。オノリーナ・カデナ・ガルシーアは生まれてから二度目となる自由の風を頬で感じていた。その日は明け方からかなり長い間、小雨が断続的に降っていた。空から降ってくる雨で即座に濡れることはなかったが、何も被らずに外を歩いていると、服が次第に湿り、体に張り付いてくる</p>
<p>Marisol Ceh Moo (2015), <i>Chen tumeen chu'úpen. Sólo por ser mujer</i>; México DF, CONACULTA</p>	<p>スペイン語 (157-264 頁) 冒頭 Corrían las cinco de la tarde, de aquel viernes de la última semana del tercer mes del año, cuando la libertad, por segunda ocasión en su vida, le azotó el rostro a Honorina Cadena García. Al despertar la mañana de ese día en ciernes, durante un largo trecho, estuvo cayendo una intermitente llovizna. Ciertamente, el agua de lo alto no era tan nutrida como para mojar al instante, aunque sí lograba humedecer a los transeúntes que en la calle deambulaban sin resguardo.</p>

ソル・ケー・モオ『女であるだけで』のマヤ語とスペイン語テキスト

への貢献がまず考えられる。マヤ文化を美化しようとする作品が賞賛されがちであり、新しいマヤ文学のほとんどがマヤの伝統文化を語ろうとするのもそのためだ。だが、皮肉なことにマヤの文化的伝統を美化する作品は西洋の読者が持つオリエンタリズムを喚起しがちだ。だとすれば、脱植民地主義文学という性格付けにも限界がある。

作家個々人の観点から言えば、当然であるが、彼らは自らの文学的才能をお互いに競い合っている。スペイン語の対訳を自ら作成するのも、より多くの人にその才能を評価してもらわねばならないからだ。作品の評価軸は明らかにマヤ語よりもスペイン語のテキストに依存している。より多くの読者を獲得した作家ほど高い評価が得られるとすれば、スペイン語話者をターゲットにせざるを得ないことは上述の通りである。先住民言

語による執筆を前提とした文学コンクールにおいてさえ、スペイン語訳の提出は不可欠である。なぜなら、審査員の全員が先住民言語を理解できるわけではないからだ。リングフランカとしてスペイン語の対訳は不可欠なのだ。つまり、先住民文学の評価は実質上スペイン語で行われる。

ならば、先住民文学（マヤ文学）はスペイン語だけで書かれていてもいいはずだ。だが、マヤ文学だけに限らず、メキシコの先住民文学は先住民言語のテキストが存在することが、マヤ文学・先住民文学であることの必須要件となっている歪な文学なのだ。

それは、先住民文学は実はスペイン語版がオリジナルであり、先住民言語のテキストはそれからの翻訳であるかもしれない可能性を多分に孕んでいることを示している。これはマヤ語のテキストとスペイン語のテキストの両方を比較しながら、翻訳した私の実感でもある。

だが、その点に触れることはタブーである。著者に直接尋ねたとしても、そうだとはいえないだろう。現在の先住民文学はタブーに包まれた文学なのだ。マヤ語のテキストが読まれないのは、実は読んではいけない、ましてや評価してはいけないテキストだからでもある。

だからと言って、先住民文学の価値が減るわけでは決してない。むしろ、そうした翻訳の作業を通じて先住民言語自体が洗練されていくのであれば、いいことだと私は考える。日本文学でさえ、明治期に行われた外国文学の翻訳を通じて、日本語表現を洗練させてきたことを考えれば、先住民文学が同じプロセスを経て先住民言語を洗練させ、近代化させていくことに何の不都合があるだろうか。先住民文学は伝統的な先住民言語で書かれていなければならないと考えること自体が、オリエンタリズム的発想に基づいた植民地主義だ。

ただ、残念なことに、先住民文学は伝統的な言語表現に依拠していなければならないとする考えは先住民作家内部にも存在する。新語の作成にも極めて消極的である。言語的革新を伴った文学作品の登場がなければ、「新しいマヤ文学」は遠からず終焉するのかもしれない。

マヤ文学を一時的なブームで終わらせないためには、先住民系人たちが自身がマヤ語のテキストを読み、それに対する批評を自由に行う環境が生まれることが不可欠であるはずだ。そうでなければ、現在のマヤ文学を読むことのできる未来のマ

ヤ人読者の誕生すらおぼつかないだろう。

「新しいマヤ文学」を読むことのできる日本の読者はきっとラッキーである。世界広しといえど、「新しいマヤ文学」を読める読者はあまりいない。しかも、先住民系人でさえほとんど味わったことのない未来の文学を読めるのだから。

もっとも、その「新しいマヤ文学」とは、筆者の訳で水声社から 2018 年に出版されたソル・ケー・モオ著『穢れなき太陽』、そして国書刊行会から 2020 年に「新しいマヤの文学（全 3 巻）」として出版されたソル・ケー・モオ『女であるだけで』、ホルヘ・ミゲル・ココム・ペッチ『言葉の守り人』、イサク・エサウ・カリージョ・カン／アナ・パトリシア・マルティネス・フチン『夜の舞・解毒草』のいう 4 冊だけである。真の意味での「新しいマヤ文学」を味わうためには詩を含めてもっと多くの作品を加えねばならない。ブリセイダ・クエバス・コブという世界的に有名な詩人もいる。だが、「新しいマヤ文学」のこれまでの軌跡と今後の方向性を知るためには、おそらくこの 4 冊で十分だ。

『言葉の守り人』の訳者解説で書いたとおり、先祖伝来の伝統を継承していくことが「新しいマヤ文学」の大きな目的である。マヤ語文学運動が「おじいさんたち」の話をマヤ語で記録するところから開始されたものであることを考えれば、『言葉の守り人』は同文学の本流にして最高傑作である。父親探しの旅が魔術的な夢世界とともに描かれる『夜の舞』では西洋のアンチテーゼとしてのマヤ文化探し、あるいはその承認が読者に求められるのだが、それは「おじいさん」を語りの消失点に据えただけであり、伝統の継承というテーゼに沿ったものである。



短編集『穢れなき太陽』  
村の娘タビタ、酒は他人の心をも傷つける、穢れなき日、など 12 編  
2018 年、水声社、2200 円



### 女であるだけで

ソル・ケー・モオ  
Sol LeWitt  
吉田栄人 訳

#### なぜ彼女は夫を「殺した」のか

女の人生はどれも似たようなものだが、「女であるだけで」人生は不条理なものになる。女が男を殺すときはまったくそれだけの理由がある。多くの女は、夫を殺さずに死んでいるだけだ。そして「女であるだけで」運命にほじろふような理由がある。

上野千鶴子

新しい現代ラテンアメリカ文学×フェミニズム小説。  
国書刊行会 定価：本体2400円＋税 新しいマヤの文学 第二回配本



### 言葉の守り人

ホルヘ・ミゲル・ゴメズ・パセコ  
Jorge Miguel Gómez Pacheco  
吉田栄人 訳

#### ぼくたちは語り、伝え続ける

近年、アニミズムの世界に生きるマヤ人の末裔が、日々苦しみ、あるいは人を楽しみ、いつか心を自らの言葉で語るようになる。われわれが失って久しい世界についての彼らの貴重な証言が、文学作品としてここに採録されたことは快挙と賞讃すべき。

木村英一

神話を舞台に繰り広げられる呪術的マヤファンタジー。  
国書刊行会 定価：本体2400円＋税 新しいマヤの文学 第二回配本



### 夜の舞・解毒草

イサック・エウカカリョ・カン  
Isaac Eucarijo Can  
アナ・パトリシア・マルティネス・フチン  
Ana Patricia Martínez Fuchs  
吉田栄人 訳

#### 歌い続けよう、最期まで

マヤ人作家たちはマヤ文化そのものをどのようにに表現すればいいのか、マヤ人として生きるとはどういうことを意味するのかを問う。その問いは、現代社会を生きた私たちが同じような問いを抱える人間共通の問いです。

一橋大学 藤野野矢

夢想的・寓意的なマジックリアリズムのマヤ幻想小説集。  
国書刊行会 定価：本体2400円＋税 新しいマヤの文学 第二回配本

新しいマヤの文学 (全3巻)  
2020年、国書刊行会、2400円

これに対して、ソル・ケー・モオとアナ・パトリシア・マルティネス・フチンは、マヤの伝統的な社会の慣習が男性中心にできていることを暴き、男性原理が生み出す様々な問題を描こうとする、いわゆるフェミニズムの作家たちである。西洋の読者の多くは先住民文学の中に自然と共生する先住民の姿やアニミズムを期待するだろう。西洋的な課題であるフェミニズムが先住民文学の中に現れること、むしろそれが「新しいマヤ文学」の主要なテーマであると言われれば、西洋の読者は驚くに違いない。

ただ、日本の一般の読者はむしろ、日本社会が抱えるジェンダー差別の問題が先住民の言葉を通じて告発されることに共感を覚えたようで、フェミニズムは「新しいマヤ文学」に対する一つの重要な評価軸となった観がある。しかし、「新しいマヤ文学」のフェミニズムは実は多様であり、ソル・ケー・モオの『女であるだけで』はその中のひとつに過ぎないことを記しておきたい。

ソル・ケー・モオとアナ・パトリシア・マルティネス・フチンの二人が伝統的な価値観を批判的に描くようになったのは、二人を取り巻く社会的な

環境の中で彼女らが個人的な葛藤を抱えていたからにはほかならないのだが、それが伝統の継承という「新しいマヤ文学」の本流に対するアンチテーゼとしての新たな展開であるかどうかは議論の余地が残るところかもしれない。いずれにせよ、二人の作品はマヤ文化を本質化して描くことの問題点を考え直すための契機となっており、「新しいマヤ文学」の展開を考える上で極めて重要な地平を示していることに疑いの余地はない。

特にソル・ケー・モオは文学作品を通じてフェミニズムを展開しただけでなく、様々な文学イベントの場において伝統的な文化の表象にこだわる先住民文学を批判してきた。また、彼女は様々なメディアからのインタビューにおいて自分はノーベル文学賞を目指しているのだと豪語してきた。しかし、それは彼女の過剰な自信からというよりは、先住民社会という狭い閉じられた社会のために書いているだけでは先住民文学は普遍文学にはなれないという信念によるものであり、むしろそれは他の先住民作家たちへの皮肉を込めたパフォーマンスと理解すべきだ。あるいは、先住民文学を普遍文学として読んで欲しいという西洋の読者への切実な呼びかけであるのかもしれない。

以上の理解は、ユカタン半島における先住民文学に限定されるものであり、マヤ文学あるいは先住民文学をチアパス州や隣国グアテマラにまで広げた場合には異なる地平が広がっていることを付言しておかねばならない。不思議なことに、先住民言語話者が依然として大きな割合を占めているいずれの地域においてもスペイン語による先住民文学が生まれつつあるのだ。

\*メキシコ南東部からグアテマラにかけて話されるマヤ系言語(約30余り)のひとつであるマヤ語は主にユカタン半島で話されている(編集部注)。

#### 吉田 栄人 (よしだ しげと)

元東北大学大学院国際文化研究科教員、現メキシコ・キンタナロー州立マヤ・インターカルチュラル大学嘱託教員。2019年度日本翻訳家協会「翻訳特別賞」受賞。著書に『メキシコを知るための60章』(明石書店、2005年)など

## ベルナルド・アレバロ政権の1年

2023年の大統領選挙決選投票で汚職と無処罰対策をかける改革派のアレバロが勝利した。それを検察が覆そうとする暴挙に出てクーデターになるかというところまで行ったが、これに抗議する国民のゼネストが展開され、紆余曲折の後、2024年1月無事に新大統領就任までこぎつけることができた。

それから1年余り、政権は「最初の収穫」として、教育、治安、保健、開発、経済、グローバルネットワーク、インフラ整備、汚職との戦いの分野で進展があったとしている（註1）。確かにそれぞれ若干の成果は上がっているが、グアテマラ社会の構造的な問題の解決につながるような改革にはまだ手がつけられていない。

新大統領の就任でもっとも期待されたことは、検事総長であるコンスエロ・ポーラスの解任だった。ポーラスは、前政権時代に汚職や人権侵害を迫及する司法関係者、ジャーナリスト、人権活動家らを標的にし、多くの人々を根拠のない罪で裁判にかけたり、亡命に追い込んだりしている。真相究明活動や人権活動を犯罪化し、検察が弾圧の機関となっていたのである。そもそもポーラスの任命自体が不規則な選考プロセスによるものだったし、汚職と司法制度をゆがめたという理由で、米国、欧州連合、その他42カ国から制裁を受けているほどの極めて正当性の低い検事総長である。だが、解任されることなく現在に至っている。解任できないのは、大統領に法的な権限がないため、議会で立法しなければならないが、与党「セミージャ運動」（Movimiento Semilla）は議会160議席中23議席と少数であり、立法までこぎつけることができない。検事総長解任以外の重要問題に関する立法も、野党との交渉や譲歩など難航している。アレバロ内閣の閣僚交代率の高さも政権の不安定さを示している。

アレバロ政権1年後の「成果」を土曜学級の村から見てみよう。アレバロ政権は、道路の補修や保健所の改修、医薬品の提供、学校の建設や給食提供などをあげている。

註1：「最初の収穫」11,000の校舎の修復、320万人の子どもへの給食提供、教員の増員、2025年に3,600軒分の住宅建設ローンを提供する準備。道路の補修、最低賃金の引き上げ、2024年の殺人率が3.9パーセント減少など

検察による弾圧の象徴的な存在がジャーナリストのルベン・サモラだろう。彼はシグロ・ベインティウノ紙、エル・ペリオディコ紙を創設し、大規模汚職の調査報道をおこなってきた。数々の脅迫を受け、拉致されて瀕死の状態になったこともあったが、それにも屈せず汚職追求を続けた。しかし当時のジャマテイ大統領の時に大統領の汚職（ロシア企業への鉱山開発権譲渡問題など）を明らかにしたため、2022年に虚偽の罪で逮捕、収監された。その後2024年に一時自宅拘禁となったが、再度収監されている。エル・ペリオディコ紙は2023年5月に廃刊に追い込まれた。サモラは、自宅拘禁中にBBCのインタビューを受け、刑務所で受けた拷問について証言している。



収監されるルベン・サモラ

しかし、教師のクレメンティナ・サニックさんによると、アシエンダ・マリア村では、何の変化も見られないということだ。約千家族ほどのこの村には公共の小学校が一つ、保健センター派出所が一つあるが、どちらもそのままだし、学校では子どもたちに給食も提供されていない。

## 守られない最低賃金

クラスで受け入れている子どもは30人だが、私



クレメンティナ・サニック先生とデルミ・メヒアさん

たちが訪問した日に出席していたのは22人。欠席が多かったのはちょうどコーヒーの収穫の時期だからということだった。地域一帯でコーヒー栽培が増えている、収穫時期にはコーヒーの実を摘む賃仕事がある。

貴重な現金収入なので多くの人が作業に行くが、仕事を手伝えるくらいの子供は手伝わせるため、そして小さな子供は一人で家においていけないために、連れて行く親が多いということだった。生活がとても苦しいのは教師もわかっているの、この時期には、子どもをクラスによこすように強くは言えない、ということだった。

大人が1日働いて得られる賃金は、70 ケツアル（約1,400円）ということだった。物価は上がっているのに、今年も賃金は変わっていないのだ。政府が決めた最低賃金である120ケツアルの半分ちょっとしか得られてないということになる。政府による農村部での一人一月あたりに最低限必要とされる食費は、670ケツアル（約13,400円）で、5人家族だと約67,000円となり、この収入ではどうも食べていける金額ではない。

### 先住民共同体との協定

重要な成果もある。それはアレバロ政権が各地域の先住民共同体と開発協定を結んでいることだ。イシル地域を皮切りに、チチカステナンゴ地域、サカプラス地域などの先住民共同体と保健、教育、環境と森林保護、水と衛生などの分野で連携をとって開発を進めてゆくというものだ。歴史的に先住民に対する差別と収奪があったことを踏まえ、現在の問題（貧困、栄養不良、乳幼児の高死亡率、就業機会の少なさ、保健と教育の低水準、インフラ不足など）は今も続く差別と中央集権、政府や自治体の能力不足、汚職などによって生み出され悪化していることを明確に認め、この解決を図るとしている。



マヤ・イシル代表と協定を調印するアレバロ大統領

### 土曜学級

今年も多くの皆さまからのご寄付と、アーユス仏教国際協力ネットワークの『街の灯』支援事業助成金50万円、そしてレコムよりの拠出で、今年度の予算140万円が確保でき、無事に土曜学級が実施できることとなった。クラスは昨年と同じチマルテナ



土曜学級

ンゴ県のアシエンダ・マリア村で、2月1日から、女の子17人、男の子13人、年齢は5歳から9歳まで。プレスクールから小学校3年までの授業をする。教師は昨年と同じクレメンティナ・サニックさん、給食担当はアウラ・マリーナさん。

### レコムの視察

3月1日に石川智子、新川志保子で視察を行った。クラスが始まってからまだ1ヶ月だったが、子どもたちの歓声に迎えられ、楽しい半日を過ごした。私たちが着くとすぐにオートミール飲料がみんなに配られたが、これは朝ごはんを食べずに登校してくる子どもが多く、空腹だと授業に集中できないのでその対策として今年から始めたのだ。ちゃんとした朝食を出すには予算が足りず、飲み物だけだが、それでもずいぶん違うということだった。クラスを見学してから、子どもたちと一緒に給食。食事の後は、子どもたちが数人ずつになって知育ゲームやジグソーパズルなどをして過ごしていた。

### 嬉しいサプライズ

アシエンダ・マリア村では2018年から2020年までも授業をしていた。今回の視察での嬉しいサプライズは、その時にクラスに通っていた少女が現在15才、高校1年生になり、毎週土曜日にクラスの手伝いに来てくれていることだった。デルミ・メヒアさんで、土曜学級はとても楽しかったし、学校の成績も上がって進学したいという気持ちになったと語ってくれた。将来は建築家になりたいそうだ。

### 参照

<https://www.wola.org/es/analysis/preguntas-y-respuestas-un-ano-en-perspectiva-para-el-presidente-bernardo-arevalo/>  
<https://prensacomunitaria.org/2025/01/bernardo-arevalo-llega-a-su-primer-ano-de-gobierno-con-una-lista-de-pendientes/>  
<https://www.bbc.com/mundo/articles/c704r427w9go>

## ラテンアメリカにおけるフェミニズムをめぐる歌の旅(7)

ついに4月8日に『日本から考えるラテンアメリカとフェミニズム』（水口良樹・柳原恵・洲崎圭子編 中南米マガジン、162頁、税込み1,650円）が刊行された。私は「序章：日本からラテンアメリカとフェミニズムを考えるとはどういうことか」、音楽についてのコラム「生きることを歌う、生きるために歌う：女性解放を歌う手法」、そして「おわりに：ラテンアメリカをまなざし、私たち自身をひきうけること」を担当した。巻末の資料ではフェミニズムの歌を見開きで紹介し、さらにWEB拡大版資料集では160曲以上の曲目リストをつけたので、ぜひ一人でも多くの人に見て欲しいし、逆に日本にこのような曲がなぜ存在しないのか、ということを考えるきっかけとして欲しい。

さて今回ご紹介したいのは、ペルーの1980年代後半に活躍したロック歌手だ。1980年に軍政から民政移管したペルーは新自由主義への転換を始め、センデロのテロとハイパーインフレで1990年には国家崩壊の危機にあった。1980年代までは欧米文化排除という文脈で規制されていたロックは、この時代一気に花開いたが、それは華やかなテレビスターたち、新たなアンデスとのフュージョン、そしてアンダーグラウンドではパンクロックなどさまざまな形を取った。

ペルーのアンダーグラウンド・ロックの中で今回紹介したいのが、パトリシア・ロンカル、マリア・テタ (María T-ta) として知られる一人の女性シンガーだ。1980年代のペルーはセンデロ・ルミノソによるテロが徐々に首都に迫り、特殊警察による締め付けが厳しくなりつつある時期でもあった。アンダーグラウンド・ロックは、バンドも観客もほとんどが男性で占められ、その中でマリア・テタの存在は異質であった。

1986年から1989年という短い活動のあと、彼女がいなくなった後のシーンでの彼女についての語りは、総じて否定的で嫌いであったというものであった（そしてそのほとんどが「男性」による語りだった）。そうして忘れ去られていたかに見えた彼女に大きく光が当たることになったのは、彼女が2012年に膵臓癌でドイツで亡くなっていたということが、2014年にSNSで関係者によって公表されたからである。



マリア・テタとエンプホン・ブルタル

1986年にマリア・テタとエンプホン・ブルタルのボーカルとしてデビューしたパトリシアは、自身のアーティストネームとして María T-ta を名乗った。T はアルファベットを「テ」と読むので、マリア・テタと呼ばれるが、スペイン語で teta とは「おっぱい」を指すため、彼女の名乗った名前自体が非常に挑発的でセンセーショナルであったことが分かる。ギターのエバン・サントス・パレデス、ベースのアウグスト・イポリト、ドラムのキンバ・ピリスで構成され、彼女以外は男性だった。また自ら ZINE (ファン向け雑誌) を発行し、絵を描いたり文を書いたりするのも相当好きで、作詞は彼女が担当していた。

マリア・テタは、活動当初からロックの中で女性が言いたいことを言える場所を作っていくこと、そのための女性の参入を促したいということが活動の目的のひとつであると語っていた。彼女は当時のアンダーグラウンド・ロックの中では異色の舞台演出を考えて演じるシンガーだった。パフォ



マリア・テタの ZINE のかなりハードな頁

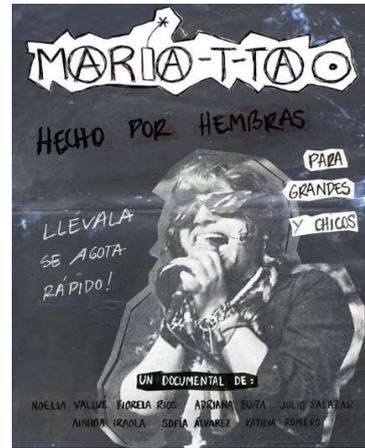
ーマンス・アートやコンテンポラリー・ダンスを学び、演劇なども通過してきた彼女は、ステージでも演出を駆使した結果、やり過ぎて出禁になることもしばしばだった。

彼女は自身を「ビッチ」として演出し、自分の人生と性を楽しむことを男性だけの特権とはさせない、それと同時に女性の自主独立を前面に押し出した。Tシャツの上にブラジャーをして、「私の名前を皆呼ぶのを躊躇するの」と挑発し（名前を呼ぶことは人前でおっぱいと声に出していうことを強制されるため）、当時の大統領アラン・ガルシアについてどう思うかという質問にも「彼とはまだ寝たことがないから、どんな人かよく知らない」と答えるなど、女性に慎ましさを求めつつ、男性が性的に搾取することを当然とすることに敢然と異議申し立てをしながら、同時に女性たちが意に沿わぬ性暴力に合うことを許さないと歌っていた。また今でいうインターセクショナルリティ、上流階級的女性による先住民や貧困層の女性へのあからさまな差別を指摘し、風刺としてあげつらった。

しかし、彼女は自らをフェミニストではないと規定し、フェミニズムを使わずにマチスモと闘わなければならないと言っている（同時に自らをアナキストであるとも言っている）。いずれにせよ、女性に課せられたケア労働、性的搾取、暴力といった問題を性の解放とともに俎上にのせ、パンクロックで歌うという彼女のスタイルは鮮烈で唯一無二のものであった。

それだけに彼女はほとんど男性によって占められたアンダーグラウンド・ロックの中で、常に敵視され、罵声を浴び、舞台から引きずり下ろされ、髪の毛をつかんで殴る蹴るなどされ、唾を吐きかけられながら、ステージを行っていたと当時を知る人は語る。それ故、彼女は歌うことを求めていたが、オーディエンスに拒絶され攻撃され続けていると常に感じていたと、彼女の友人たちは述べている。

彼女への攻撃は激しくなり、彼女がテロリストの容疑をかけられて1986年に特殊警察に捕まり、普段コンサートでも言われるような罵声を浴びながら、窒息させられ、便器に頭を突っ込まれ、体内に指を押し込まれ、といった5時間に及ぶ拷問を受けた。無事解放された後も、彼女は警察に監視されているのを感じていたという。当時、彼女がペルーのアンダーグラウンド・ロックで初めて作ったガールズ・バンドのコンチャ・アクスティカには未成年者



2017年に製作されたドキュメンタリーのフライヤー、  
Ⓐがアナキズムのマークとなっているのもポイント

もいたため、警察の圧力が強くなるのを感じて、彼女は仲間に害が及ばないように1988年にこのバンドを解散したのだと語られている。

これだけの暴力の中で、これだけの先進性をもって活動した彼女は、それ故に評価されなかった。良きバンドメンバーに恵まれ、女性たちにエンパワメントもしていたはずだが、男性中心のアンダーグラウンド・ロックの中では忌むべき異端児として無視され、罵倒されながらの活動を余儀なくされてきた。ホモソーシャルの王国であったアンダーグラウンド・ロックにおいて、マリア・テータは過激に反マチスモを叫ぶことで、彼らの内なる女性嫌悪、女性差別を覚醒させ、むしろ暴走させることになっていた。

同時に彼女の活動はスペインのテレビ局の関心を引き、1988年には密着取材が行われている。こうして彼女の活動の意義はアンダーグラウンドの外では徐々に理解され始めたが、1989年、彼女は突如活動を停止し、1990年か1991年には完全に消息不明となった。この時期は首都リマでもセンデロ・ルミノソによるテロが激化し、ハイパーインフレで国家自体が完全に崩壊寸前であったため、海外につてのある多くの者が国外脱出していた時期でもあった（日本は1990年に入管法改正で日系人を労働力として受け入れを決めたため、日本にルーツを持つ多くのペルー人が訪日することになった）。

こうして、マリア・テータことパトリシア・ロンカルは、2014年にその死が判明するまで長らく忘れられた存在となっていた。それ故に、時代が追いついた21世紀において、彼女の活動の意味がようやく理解され、評価されることになったのである。

## 文豪バルガス=ジョサと教皇フランシスコ

ペルーの文豪マリオ・バルガス=ジョサ (1936～2025年) が4月13日、リマ市太平洋岸の断崖上の邸宅で死去した。89歳だった。アルゼンチン出身のローマ教皇フランシスコ (1936～2025年、4月21日死去、88歳) に8日早い永眠だった。教皇は2013年3月13日に即位したが、その8日前の3月5日、ベネズエラ大統領ウーゴ・チャベスが腰部癌で58年の生涯を閉じた。この2つの「8日の時間差」が気になった。偶然の数字の一致に過ぎないのだが。

チャベスは当時、ラ米で最大の影響力を誇る政治家だった。その拠り所は軍事主義、シモン・ボリーバル思想、カトリシズムだった。晩年の2年半は不治の癌に苛まれ、しばしばカトリック教会で我が身の延命を祈願していた。フランシスコ教皇の誕生を知らずに世を去ったが、もし命があと数ヶ月続いたとすれば、延命装置を付けたままバティカンに赴いた可能性があったはずだ。

作家生活66年のバルガス=ジョサとイエズス会士歴67年の教皇 (本名ホルヘ=マリオ・ベルグリオ) は同時代のラ米人同士だった。バルガス=ジョサは「保守右翼」、教皇は「中道左翼」と捉えられ、ラ米の思想対立の「象徴的代表」と見なされていた。

キューバ革命の起きた1959年、作家デビューした青年バルガス=ジョサはたちまち熱烈なキューバ革命支持者になる。だがフィデル・カストロ首相 (当時) のキューバ革命体制の「制度的ソ連化」が進行し「社会主義リアリズム」の風潮が良しとされつつあった1970年代初頭、詩人エベルト・パディージャが斬罪された。これを機にバルガス=ジョサはキューバ革命と袂を分かち、社会主義、左翼、変革主義などへの反対へと傾斜してゆく。21世紀に入るや、世界各国の極右勢力と同席、彼らの誤った主張の宣伝に一役買うのを厭わなかった。

一方、1969年に司祭になったベルゴリオは1976～1983年のアルゼンチン軍政期に軍政最高幹部の一人と連絡があった事実や、「イエズス会士2人の失踪に関与したとの虚偽情報」を流されたことで不利な立場に陥った。だがそれを乗り切って、1992年司教、1998年ブエノスアイレス大司教、2001年枢機卿と階段を上った。そして敬愛していた13世紀の「アッシジの聖フランチェスコ」にあやかり、フランシスコの名を襲って教皇となる。「社会正義」を打ち出すが、

脳裡に南米産の「解放の神学」思想があったのではないか。カトリック大陸ラ米の最大の信者の塊である貧困庶民の救済を優先対象に定める。バティカンに不満と反感が充満するが、意に介さなかった。

2010年に念願のノーベル文学賞を受賞し「ガブリエル・ガルシア=マルケスに追いついた」バルガス=ジョサは、ますます政治発言を強めてゆく。だが舌禍事件を起こす。2011年のペルー大統領選挙決選は、陸軍士官出身で先住民系の民族主義者オヤンタ・ウマーラと日系人の保守主義者ケイコ・フジモリの対決となった。ケイコの父は1990年の大統領選挙決選でバルガス=ジョサを破った故アルベルト・フジモリで、恥辱にまみれたバルガス=ジョサはフジモリ父娘を蛇蝎のように忌み嫌っていた。

あろうことか、バルガス=ジョサはウマーラとケイコの決選を「癌かエイズかの選択だ」と言って憚らなかつた。功成り名遂げた人物の傲慢で偏見に満ちた差別発言であり、国際ニュースになった。ところがペルー国内では大方、聞き捨てられてしまったのだ。

フランシスコ教皇が掲げた「社会正義」がバティカンを動揺させたとき、バルガス=ジョサは教皇を批判した。教皇は2015年9月に訪米し、「米資本主義の行き過ぎ」を批判する。するとバルガス=ジョサは「資本制と自由・民主は不可分だ」と反論した。この作家と教皇が対面し話し合うことはなかつた。だが作家は教皇の大集会での演説を群衆の一人として聴き、楽しんだこともあったらしい。筆者はバルガス=ジョサの文学作品を評価する。だが政治活動は評価しない。

スペイン国王フェリーペ6世は、「教皇とバルガス=ジョサはスペイン語を母語として共有し、ともにホルヘ=ルイス・ボルヘス (1899～1986年) を礼賛していた」と指摘、冥福を祈った。

余談だが、ボルヘスは1976年9月、血塗られたチリ独裁軍政のアウグスト・ピノチエー将軍から最高勲章をもらうためチリを訪問し、内定していた同年のノーベル文学賞受賞を逃した。スウェーデンのノーベル委員会はボルヘスにチリに行かないよう警告していたが、作家は自由意思を行使した。これは、ボルヘスの妻だったマリーア・コダマから後年聞いた逸話だ。

## (1) ナルコ領域：アマゾン国境域 7 割超支配

国境横断ネット・オホ・プブリコが調査を実施したアマゾン上流域の国境に隣接するブラジル (33)、コロンビア(9)、エクアドル (19)、ペルー (20) の 75 地区のうち 54 地区で麻薬に関連する 11 の犯罪組織を確認できたという。

コロンビアのコマンド・デ・ラ・フロンテラ (CDF, 2020 年頃元 FARC 分派によって形成、23 地区) とブラジルのコマンド・ベルメリオ (CV, 19 地区) は 2 カ国以上で活動する 2 大勢力である。ベネズエラと国境を接するブラジル・ロマイラ州 15 地区のうち 6 地区はブラジルの首都第 1 コマンド (PCC, 12 地区) の支配下だが、残りの地区では CV やベネズエラのトレン・デ・アラグアなどとの縄張り争いがある。

これらの地区でナルコ組織が行っているのはコカ栽培、コカイン精製、コカイン流通 (コロンビアは全 9 地区) だけでない。ペルーとエクアドルの地区ではバルサ材など違法な木材の伐採 (エクアドルは全 19 地区) が行われている。ペルー・ブラジルの国境にまたがるレテシアに近いコロンビアのラモン・カスティージャ地区では、2019 年頃からコカ栽培が急速に拡張し約 3,700ha と 3 倍近く増えたという。ペルー領域で減少した森林面積の 64% がコカ栽培に伴うものとされる。コロンビアのプツマヨ県やペルーのアマズナス県では、主に金採掘を目的とした違法な鉱山活動 (ペルーは 29 地区中 16 地区) が行われている。

国境域の河川では通常の連絡船以外にもベスティア (獣) と呼ばれる小型船舶が日夜航行し、麻薬関連製品や密輸品などを運んでいる。当局の取り締まりが希薄なため、ナルコ組織による殺人事件も増加している。また小規模だが違法な漁撈活動や希少な動植物の違法取引、



調査対象のアマゾン上流域の国境に隣接する 79 地区

人身売買なども報告されている。

出典：  
<https://ojopublico.com/5569/territorio-narco-el-70-las-fronteras-amazonas>

## (2) 見たくない現実をお見せしよう

4 月 4 日、国連強制失踪委員会 (CED) は、メキシコ全域で強制失踪が体系的に発生しているという報告に基づき、メキシコ政府に関連情報を提供するよう要請した。その前日には、3 月上旬に発覚したハリスコ新世代カルテルの人材調達・訓練場として使われたとされるハリスコ州テウチトランのイサギレ農場での大量殺害の現場 (200 足以上の靴や衣服、焼かれた人骨発見) に関連し、証拠保全、犠牲者特定と真相解明、犠牲者家族の調査参加、行方不明者を探す家族の保護などを政府に要請していた。

メキシコ人権委員会やシェインバウム大統領は、強制失踪は犯罪組織によるもので国は関与していないと表明し、国民再生運動など与党は、1965~90 年までの「汚い戦争」はともかく AMLO 政権以降は国による強制失踪はないと強弁した。上院は国連報告の拒否と CED 委員長解任要求を 4 月 10 日に賛成多数 (71 対 28) で採択した。一方、行方不明者を探す諸組織は、12.7 万人の失踪者の存在を否定し隠蔽する政府に抗議し上院を象徴的に封鎖した。

CED が指摘する国の責任とは強制失踪に責任ある対応をしなかったことである。国は強制失踪に関与していないとするが、2005~24 年までに有罪判決が下された数少ない強制失踪事件の実行者の 50% は行政区警察、軍と州警察が 15% づつとなっている。4 月 24 日にアルダマ地区でおきたサパティスタ支持者 2 名拘束のように国家警備隊や軍警察の出動後に行方不明者が発生する例は枚挙にいとまがない。失踪者を探す人たちに対する犯罪視や迫害は絶えず、2010 年以降に 27 名の関係者が殺害、行方不明 3 名とされていたが、イサギレ農場の実態を暴露したグループ関係者も 4 月になって 3 名が殺害されている。



農場で発見された靴や遺品

出典：  
<https://piedepagina.mx/les-traemos-la-realidad-que-no-quieren-ver>  
<https://adondevanlosdesaparecidos.org>, 3 月 19、20、27 日、4 月 24、27 日

## 編集後記

現地に赴くのが億劫になっているが、今では Youtube など各地の様子を知ることができる。今年の聖週間（4月13～20日）の聖金曜日（イエス受難）の映像には驚かされるものがあった。グアテマラのサンティアゴ・アティトランでは、十字架から降ろされ寝棺に納まるまで、人々がイエス像（手足の傷跡）に痛み止めスプレーを噴霧し続けていた。またメキシコのイダルゴ州パチューカのエル・ロボ地区では、イエスやバラバだけでなく、姦淫した女（女性が演じる）が一聖書では実際には石を投げられることにはならない一鞭打たれ、道を引きずり回されるシーンがあった。ネットでは伝統の名のもとで女性への暴力が肯定されていることへの批判が書き込まれていた。同時期にチアパス州テネハパの新カラコル・ハシント・カネックで開催されたサパティスタ集会「反逆と暴露：芸術—未来に向けての反乱と抵抗」（4月13～19日）のイベントの多くも観ることができたが、ソピローテという日墨合同バンドの演奏はまだ見つけられていない。

小林 致広

今回の印刷作業は東京で、2025年8月10日（土）

発送作業は関西で、2025年8月17日（土）の予定です。

参加いただける方は、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで連絡ください。

Vol. 190 2024年4～9月メキシコ滞在記	Vol. 187 蜂起から30年、サパティスタ運動の現在
Vol. 189 メキシコ初の女性大統領誕生の陰で	Vol. 186 2023年エクアドル大統領選挙、その混乱の中で
Vol. 188 日本からラテンアメリカに広がる「障害者革命」	

## メーリングリスト

レコムに入会（もしくは購読）すると、メーリングリストにも無料で参加できます  
メールアドレス、自己紹介を添えて、[recom@jca.apc.org](mailto:recom@jca.apc.org) まで、ご一報ください  
メーリングリストに登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています

## 会員の種類

- ☆会 員：年 8,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆学生会員：年 5,000 円 …会の運営、総会参加・投票、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆賛助会員：年 10,000 円（一口） 総会参加、『そんりさ』購読、資料閲覧貸出
- ☆購読会員：年 4,000 円 …『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

<b>レコム連絡先</b> 〒678-0001 兵庫県相生市山手2-502-1 大西方 お問い合わせは、郵便、もしくはe-mailで お願いします。 ホームページ： <a href="http://www.jca.apc.org/recom">http://www.jca.apc.org/recom</a> <a href="https://recom.r-lab.info">https://recom.r-lab.info</a> e-mail： <a href="mailto:recom@jca.apc.org">recom@jca.apc.org</a> Facebook： <a href="https://www.facebook.com/recomsonrisa/">https://www.facebook.com/recomsonrisa/</a>	<b>郵便振替口座：00110-7-567396</b> 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク レコム口座 158万4265円 グアテマラ基金口座 59万7827円 (2025年5月現在) そんりさ (SONRISA) 191号 2025年5月10日発行 日本ラテンアメリカ協力 ネットワーク (RECOM) 定価 400円
---	--